講義９　牧会論

１．テキスト　藤本満『ウェスレー』　３７７頁から３９９頁　第１２章伝道者として

預言者と祭司、牧会伝道者と牧会者という区別をもっていた。教職には預言者的なものと祭司的なものとの二つの流れがあり、その一つが説教し伝道して回るという使命を帯び、もう一つが特定の会衆に留まり、牧会し、聖餐式を行うという使命を受けている。この二つの流れは決して対抗するものではなく、互いに補い合う役目を果たしている。（藤本　３８４頁）

ウェスレーにとっては、伝道と信徒の育成は両方重要なものでありました。教会形成は、この両輪によってなされていくのです。ウェスレーの牧会論の原則は何なのでしょうか。

この課の終わりまでに

① 牧師がいかにしたら牧師としての自分を個人的な生活と牧会と合致させることができるか考察する。
② ウェスレーの、メソジストソサエティにおけるスピリチュアルフォーメーションへの意欲を認識する。
③ 信徒牧師、信徒伝道者を育成したウェスレーのキリスト教教育への信頼を学ぶ。

ウェスレーは基本に忠実であるという意味において彼の様々な牧会原則を徹底的に守りました。しかし、彼は基本に忠実であることを体制を維持する為には用いませんでした。さらに崇高な目的の為に、人々を救い、教育し、宣教へと派遣する目的の為に用いたのです。その為にウェスレーは通常の職務と、特別な職務を区別し、例外をつくりました。形式主義に固定される生き方ではなく、聖書・伝統・理性・経験を駆使して、その場の状況をわきまえながら行動したのです。その点で実践的でした。

ウェスレーは国教会の司祭を一つの教会を牧会する通常(ordinary)の教職とみなし、メソジストの伝道者を、通常の枠組みの外で直接的に神からの召命を受け、伝統と政治と教区に縛られていた当時の国教会が手をのばせない大衆へと伝道する預言者的存在と考えていた。彼らは、通常ではない―特別の(extraordinary)―任命のもとに働き、それ故に按手を授けたり、聖餐式を執行するという制度的仕事に携わるものではないという。（藤本　３８４頁）

ウェスレーの引用

１７８４年以前は、ウェスレーは以下のことを強く主張していました。「神はメソジストを分離する民となるように、あらかじめ定めておられたのかもしませんが、これは、彼

らを育てる神の計画とは全く正反対のことでした。つまり、聖書的な宗教を国中に、あらゆる教派に広めるために彼らを起こされたのです。自分の意見を持つことをあきらめ、礼拝の様式に従うこともあきらめてでした。これは、彼らがかつての自分たちを忘れ、「愛によって働く信仰によって」国家に影響を与えることによってなされたのです。

説教　　神の葡萄畑

牧師の質

１．　よき理解、健全な判断、理由づけする能力
２．　洞察力
３．　記憶のよさ
４．　牧師としての召命に対する深い理解
５．　聖書の深い知識
６．　聖書の原語の知識の豊富さ
７．　科学、哲学、論理学の知識
８．　教父に関する知識の豊富さ
９．　人々の人格や性格の理解
１０．　常識
１１．　礼儀正しさと学識の高さ
１２．　神と人への愛
１３．　個人のホーリネスへの切望
１４．　神の恵みに協力しようとする切望

資料１２　牧師への勧告を読みなさい。

ディスカッションでは、説教を通して、自分の牧会、将来行う牧会においてどのように適用できるかを考えましょう。

ウェスレーの引用

ウェスレーは貧しい人々に牧会する為に、豊かさから遠ざかりました。ウェスレーは批評家に対して「名誉をいただくこと、偉大であることはあなたに譲ります」と語っています。そして、「貧しく、平凡であり一番底辺で、社会的地位もなく歩みなさい」と語ります。

理性ある宗教を持つ人々へのさらなるアピール

ウェスレー神学者、テオドア・ランニョンによれば、「ある神学者はウェスレーの聖化の教理と社会変化のための運動の間に類似性がある」と語っています。キリスト者の

完全を個人的に達成することが目標になるならば、基本的な希望は未来が現在より優るということになります。その結果、現在の状態に対する聖なる不満足、つまり個人が変容していく過程を保つために、不満足が付随して起こるのです。さらに、この聖なる不満足によって、個人の領域から社会の領域へと移っていくことが可能な状態であり、現在の状態からより完全な方法へと改革する永続的な動機が供給されます。

新しい創造、ジョン・ウェスレーの神学　ランニョン

ウェスレーはこのような形で恵みが広範囲に広がっていくことを願っていたのです。それ故にウェスレーの視野には、個人において達成された成果が社会的にも展開されていくことを願っていたのです。

ウェスレアン神学に基礎をく牧会の特色

ウェスレー神学は楽観主義的であり、それも、個人の変容だけでなく社会の変容においても特に楽観主義的であります。また、全き愛が個人の人生だけでなく、教会だけでなく世において違いをおこすことができるのです。ウェスレーの非常に厳格な個人のホーリネスに対する焦点は、個人を自分のまわりの人々に対して全き愛の代行者とするということです。内的な変容は、もしそれが真実で維持されるとしたら、ウェスレーが「慈愛のわざ」と呼ぶものにつながります。ウェスレー神学の全体性は、人々の人生に真実の愛で触れるということです。

伝道

あなたは魂をするのです。それ故に、このわざに励みなさい。そして、ただ単にあなたを必要としている人のところに行くだけでなく、最もあなたを必要としている人のところに行くのです。観察しなさい。どれくらい多く説教するか、どれほどこの社会、あの社会の面倒を見るかはあなたのなすことではありません。しかし出来る限り多くの魂を救いなさい、そして罪人を悔い改めに導きなさい。

幾つかの会話の記録より　Jackson 8:310

「救いということで私は、一般的な意味によれば、地獄からの解放、天国へ行くことを意味するだけでなく、現在においても罪から解放されること、魂が原初の健康できよい状態に回復すること、神の性質の回復、神の像に魂が義と真実のホーリネス、義、あわれみ、真実に刷新されることを意味します。

理性と宗教の人々へのさらなるアピール

また私たちのいくべき方向として導かれる必要があるのです。

ウェスレーは野外説教をすることにおいて、説教するときに現れる神の本当の力を体感した。自らを卑しくすることにおいて、神の恵みを証しする人物と変えられていた。（３７８頁）

私も藤本師のこの言葉に賛成です。さらに言えば、ウェスレーは野外説教において、神の言葉の力の素晴らしさを実感したと思います。ウェスレーが後期においてバランスのとれた生き方ができたのも、野外説教を通して自分の信じた福音の素晴らしさを実感したからだったと思います。これを第３回目の回心と呼びたい思いがするくらいです。

伝道者として長距離を旅行するが、時間厳守を尊ぶ人でもあった。（３８２頁）

伝道者としてのウェスレーは、実にバイタリティに溢れた人であった。（３８３頁）

ウェスレーたちは、回心に導いた人たちをソサエティーに集め、引き続き彼らの霊的指導にあたった。救われた魂に継続した〈キリスト教教育〉を与え、世界大の〈宣教〉のビジョンを受け付け、この世と御言葉の接点である〈社会問題〉に大胆な信仰による挑戦を投げかけてきた。（３８８－３８９頁）

牧会

ウェスレーは、伝道で救われた人たちの霊的成長を何よりも望んでいました。

ウェスレーが、電話もなく、飛んで行けるような距離や状況でもない時の用いた牧会の手段は、手紙であった。ベーカーの綿密な調査によると、１７３０-１７４０年代は１０年に２００通の割で、５０年代は３００通、６０年代は５００通、晩年になると数は減るどころか増す一方で、１７７０年代は１０００通、８０年代は何と１３００通を書いている。(藤本　３８１頁)

ウェスレーの教会の教理の中心は、相互養育です。ウェスレーは多くの教区でこれが欠如していることを嘆き、メソジズムは異なるべきであることを勧告しました。誰が愛において彼らを見張るのでしょうか。誰が恵みにおける成長を記録するのでしょうか。誰が彼らと共に、また彼らのために祈るのでしょうか。これ、これのみが、キリスト者の交わりなのです。しかし、ああ、どこにそれが見出されるのでしょうか。東や西、北と南も見てご覧なさい。あなたが喜ぶ教区の名前をあげなさい。そこにはクリスチャンの交わりがありますか。むしろ、この教区の大半は、砂上の楼閣ではないでしょうか。彼らの間にはクリスチャンのつながりはあるのでしょうか。お互いの重荷を持っているのでしょうか。

スピリチュアルフォーメーション

霊的に成長していくことはウェスレアン主義の核心です。ウェスレアンの文脈において、仲間のキリスト者と相互に信頼することによりホーリネスと愛において成長するこ

とを付け加えることができます。霊的に形成されていくためには私たちが死ぬまで続く聖化の過程です。これがウェスレーの目標でした。そしてそこから彼らが既に経験した聖化の愛を生きるのです。ウェスレーにとって教会がなしではこれは困難なことでした。

キリスト教教育

ウェスレーは教育はソサエティや組会でおこると期待しました。教育はメソジズムの最前線で為され、実践的な意味合いを持つものです。知識を持ちつつ行う献身的な生活はキリスト者の生活にとって重要なものです。ウェスレーはメソジストの「宗教箇条」の解釈についていかに聖書を解釈していくか、課題が広範囲に及ぶことを知って欲しかったのです。それは前世紀のデボーションナルな古典のみならず、メソジスト会議で議論されたホーリネスに関する最新の理解を常に持とうとしていたことにもあらわれています。

ウェスレーの引用

ウェスレーは、常に来たるべき王国を現在の救いと関連づけました。「主は、既に地上の表面を刷新しようとしておられます。私たちは、主がはじめられたその業を、主は主の日まで継続することを知っています。主がしてくださった約束を果たされるまでは、主は、この聖霊の祝された働きを決して止められることはありません。主が罪とみじめさと欠け、そして死に終止符を打ち、普遍的なホーリネスと幸福を再建するまで、そして世界の居住者がともにハレルヤと賛美するまで、その働きは止まることがないのです。」全能主が支配される。（説教　福音の普遍的な広まり）Works, 2:499.

ウェスレーは将来を、「新しい地球」が希望の霊的な言及によって覆われるとしています。「時が満ち、預言が成就したとしましょう。どのようなことを期待できるでしょうか。武器の騒音はなく、混乱もなく、血にまみれた衣もないのです。どの国家も市も分裂もなく、断腸の思いもありません。・・・「賢い者でさえ狂わせてしまうという抑圧もなく、貧しい人々の笑顔を奪うゆすり、強盗、不正、不正義もありません。」すべての者が自分の持っているもので満足しているからです。このように「正義と平和が互いに抱擁を交わすのです。」希望が国中に満ちるのです。「義が地上からあふれだし」「平和が天から地を見下ろすことがおこるのです。」（霊的キリスト教）Works I:170-171.

ウェスレーは伝道の普遍的広がりを望みつつ歩んだ人物であったのです。ウェスレーの説教はキリストの宣べ伝えるという主題テーマがありました。(藤本３８６－３８７頁)

ウェスレーのまとめ

ウェスレーは、最後までメソジスト運動を英国国教会の中の信徒活動と位置づけていましたが、1786年アメリカ合衆国が独立し、国教会が司祭をすべて英国に引揚げさせたため、まず新大陸のメソジスト会が非国教会派の教会として独立せざるを得なくなりました。

そしてウェスレーの没後、1797年には英国のメソジスト会も独立したメソジスト教会となりました。

それまでの教会は、各教会ごとに一定の地域とその住民を管轄する形をとり、その地域を教区（Parish）と呼んでいました。それに対しメソジストの教師たちは、それぞれが分担して各地のメソジスト会を巡回訪問して信徒たちを指導する形をとっていたため、自らの担当区域を巡回区（Circuit）と称しました。教師一人一人の分担がサーキットとなるため、時には地理的に全く離れた地域が同一のサーキットに属するという事態も稀ではありませんでした。

ジョン・ウェスレーはこうした体制の下にさらに先を展望し、生前「世界はわが教区（Parish）なり」との信念を掲げた。自らの活動を、一定の地域に限ることなく、まさに聖書が告げるように「地の果てに至るまで主の証人となる（使徒言行録1章8節）」ことを志し、熱烈な伝道精神をたぎらせていたのです。

かくしてメソジスト教会はウェスレーの志を受け継ぎ、まず北米大陸に、そしてアフリカやアジアの未だ福音を知らない諸地域に向って、活発な伝道活動を展開していきました。18、19世紀は交通・通信手段の目覚ましい発展にも支えられて、キリスト教の諸教派はこぞって世界伝道を志しましたが、その中核を担って極めて熱心な伝道活動を展開したのは、「世界をわが教区」としたメソジスト教会であり、しかもその活動は単なる教理としての福音の伝道というに止まらず、教育に福祉に、あるいはさまざまな社会活動にと、まさに「キリストの愛に日々共に生きる」運動（ムーブメント）として展開されていったのでした

Best Of All　God Is With Us　最も素晴らしいことは神が共にいてくださることだ。

ジョン・ウェスレーの生涯は、まさにその道程としての「完全」を示していました。メソジスト運動を起こしてからの彼は、ロンドン、ブリストル、ニューキャッスルを中心に、求めに応じて馬や徒歩で町々を巡り、各地で説教し、会員の生活訓練、指導にあたり、貧しい人々のための学校や福祉施設の設立に奔走した。生涯を通じて彼が旅行した距離は約35万キロ、50年間に4万回を超える説教をしたと伝えられています。弟チャールスをはじめ他の多くメソジスト指導者たちもこれに倣ってその生涯を捧げました。

馳せ場を走り終えたジョン・ウェスレーは1791年3月、次の言葉を残して88年の生涯を終え、天に召されました。“The best of all, God is with us”「最も良きことは神が共にいまし給うことである。

日誌について　個人的な省察と統合のためのツール

このコースへの登録が、皆さんの将来の牧会にとって、また既に牧会の現場に立っている方々にとって役立つようにと祈ります。講義のメモ、関連説教や参考書のリーディング、議論への参加、レポート作成等を行っていただくのですが、同時に重要なのはスピリチュアルフォーメーション（霊性の育成）です。スピリチュアルフォーメーションといえば皆

さんは何を思い浮かばれるでしょうか。デボーションを考えられる方もあるでしょう。文字通りには、恵みにおける霊的成長を意味します。しかし総じて言えば、これは、意図的にあなたと神との関係を霊的に耕すことです。このクラスの活動が、あなたの牧会・修養生としての知識、技能、才能を増し加えることを願います。そのためにも日誌をつけることは必須です。そのことにより、自分に得たものをさらに受肉させることができるのです。そうすることにより、頭で学んだものが、あなたの心に届くようになるでしょう。

他にもあなたと神との関係を耕してくれる様々な恵みの手段はあるでしょうが（聖書通読、聖餐、霊的な書を読むこと等）、日誌をつけることはそれら全部をむすびあわせるものです。日誌をつけることはあなたの人生において得た経験と洞察を記録するという意味もあります。日誌を定期的につけるということはある一定の時間をそのために確保することが必要です。たとえば、多くの責任を抱える皆さんは、定期的に日誌をつけることによって、自分にとって本当に必要なものと、そうでないものを見分けることができるのです。一日の内５分間、日誌をつける時間を聖別することによってあなたの人生の質が変わってくることを願います。

日誌をつけるときにはどのような準備が必要なのでしょうか。ペンと用紙があればいいのですが、パソコンをもっておられる方はパソコンに入力できます。スマートフォンがかなり流通しているのですが、携帯でもＯＫです。重要なのは日誌の質です。どのようなスタイルであっても、あなたにとって有効な様式を発展させることが重要です。

日誌を書くための時と場所をどのようにするかはとても重要です。日誌を書く空間を確保しなければ規則的に書くことは不可能です。一日の終わりにそのような時を持つことはもっとも自然でしょう。自分が発見したこと、明らかになったことを考えることができます。しかし家族との交わり、夜の様々な活動、疲労があり思うようにいかない場合もあるでしょう。朝ごとに書くという手もあります。しかし睡眠が間にあり、前の日に起こったことにフィルターをかけたり、朝一番にすべきことであるにもかかわらず、深い洞察を加工したりすることもあります。日誌はデボーションと一緒に行うという手もあります。御言葉と共に、あなたの経験を言葉に置き換えることが可能です。また日誌をいつも持ち歩いていると思いがけない時に考えが浮かび、それをかきとめることもできるでしょう。

日誌を規則的につける時に、あなたの日誌はご自身の旅路の宝庫となります。日ごとにつけることが重要ですが、日誌は繰り返しみてこそ価値のあるものとなります。週毎に何度も日誌を見返してください。それをまとめてみるのも重要です。聖霊がどのような成長をもたらしてくださったか。一月が終われば、月ごとに日誌を見返してください。この時には、できればひとりになれる場所で、また集中できる場所で行ってください。これを行うことによって言葉がいかに重みをもっているか、この授業を受けた喜び、牧会上の経験を感じることができます。信仰の成長と学びの成長を同時に実感できる瞬間です。このような統合の時間を持つことは、あなたの頭の中にあるものを心の中に刻むことができるのです。これがまさに霊感を受けるということです。牧会は、何かをすることでなく、い

かにあるべきかという側面が重要です。日誌は教育を受け、教える時に味わう中心的な問いに答えることを可能にします。それは「なぜ私はするのか、私は何をするのか、私はそれをいつするのか」という問いです。

日誌それ自体は、牧会の準備において要となるものです。日誌は、霊的成熟、内容をマスターするためのあなたの旅路の年代記です。この日誌は豊かな洞察とともにこの教育を統合するものです。日誌は統合の道具なのです。あなたの日誌をつける過程が財産になりますように。

学課の目標

宿題

ジョン・ウェスレーの神学と実践を適用しなさい。あなたの将来の牧会にどのように適用できますか。